

ふるさと御所 文化財探訪

其の二十四

古墳時代〈12〉

葛城氏の盛衰
(1)

破格の規模の
室宮山古墳

生涯学習課 文化財係
☎内線696



写真1 葺石と埴輪列の検出（平成6年調査）

級の円墳や方墳に過ぎません。近隣を見渡しても墳長62mの前方後円墳である新沢500号墳が最大で、墳長300mにもなりなんとする天皇陵古墳が連綿と築造される、大倭・柳本古墳群や佐紀盾列古墳群がある奈良盆地の中にあつては、総じて盆地西南部や中南部は前期古墳の希薄な地域といえます。

そうした中、5世紀前葉に至つて室宮山古墳が突如として出現します。墳長238mはその時期に限れば奈良県最大で、破格の規模を誇ります。三段築成の墳丘の斜面には葺石が施され、各段のテラスには円筒埴輪と朝顔形埴輪が樹立されます。平成6年度の調査で設定した試掘トレンチ（写真1）はちょうど前方部北側張出部の取り付き部分にあたり、張出部の形状も推測できるようになりました。図1は木許守さんによる墳丘

復元図で、築造当時の内容が偲べれます。

埋葬主体は後円部には墳丘中軸を挟んで2箇所あり、前方部にも2箇所、張出部にもそれぞれに1箇所ずつ、そして周堤に乗るかたちで築造された陪塚のネコ塚古墳に1箇所が想定されます。

後円部の2箇所の竪穴式石室には、共に兵庫県

高砂市で産出する竜山石製の長持形石棺（写真2）が納められています。長持形石棺は「王の棺」とも称され、とりわけ室宮山古墳後円部南石室のそれは蓋石の長さで示すと3・51mという大変豪壮なもの

です。なお、本墳は竪穴式石室内に長持形石棺が納められたままの状態で見学できる全国唯一の例としても有名で、遠来の見学者が絶えません。

5世紀前葉当時にあつては奈良県最大という突出した規模の古墳がなぜ南葛城の地に何の前触れもなく突然に出現するのか、5世紀代の天皇陵古墳に匹敵する規模の長持形石棺



写真2 後円部南石室の長持形石棺（昭和25年調査）

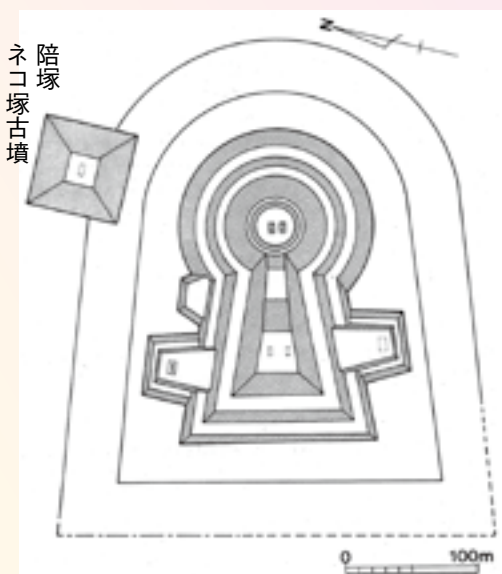


図1 室宮山古墳墳丘復元図

が用いられることの意味は何か、巨大な墳丘には複数の埋葬主体があるがそれぞれの被葬者はどのような人物と考えられるのか、陪塚ネコ塚古墳は何のために築造されたのかなど、これらの命題はただ単に南葛城地域の個別の事象にとどまらず、日本古代史の謎を解明することにつながるものです。次号から少しずつ紐解いていきたいと思います。

（文責 藤田和尊）



2010. 8